永遠の命を得るため

　それは、ある夜の出来事でした。明るい陽の光の下ではなく、夜の闇にまぎれるようにしてイエス様のところを一人の男が訪れます。夜の訪問者には気を使います。明日まで待てないという緊急の場合が考えられる、いわば医者でいう急患扱いのケースと。人目を避けてというナイーブな問題、相談者がわの体面にかかわるような、しかし相談せずにはおれない、やむに止まれない思いがある。
その男は、ファリサイ派の議員であったニコデモという人物です。彼が、ある夜、イエス様のところを尋ねて来て、救いについて問いかけたのです。
　もう少し、ニコデモが、夜に訪れたということを掘り下げてみたい。といいますのもヨハネによる福音書の特徴として、対立するふたつのイメージを繰り返し用いて、読者を導くからです。たとえば光と闇、肉と霊、神の国とこの世といったものです。ヨハネによる福音書第１章の有名なロゴス讃歌は次のように語ります。
　「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。言のうちに命があった。命は人間を照らす光であった。光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。」
　５節までを紹介しましたが、ここまでで、もう今日ご一緒に読んだ３章の、イエスとニコデモの対話のお膳立てが出来ていますね。
　ニコデモはファリサイ派であり、ユダヤの議員でもある。それは国の運命をつねに考える立場にあるということです。すでに彼らが異民族支配のもとに置かれて５００年近い月日が流れています。イスラエルを解放するメシアはいつ現れるのか。イスラエルの上に、ふたたび義の太陽が現れ出る日を求めて、１章では洗礼者ヨハネ

のところにもエルサレムから使者が遣わされて、あなたはメシアですか、と調査が行われたことを福音書記者は記しています。ヨハネはそうではないと応えている。すると今度は驚くべきしるしを行われるイエスが現れた。このようなしるしは、神が共におられるのでなければ、誰も行うことはできない、そう確信して、ニコデモは夜の闇に紛れて、イエスのもとを訪れ、問いかけたのです。それは闇の支配するなかにあって、神の救いはどこにあるのですか。あなたがその方なのですか、という問いかけでした。イエスさまの語られる言のうちに命があり、それが人を癒される。救われる。言葉のなかにある命は人間を照らす光であり、その行く先を示します。それを見て、ニコデモはやってきました。たしかに光が暗闇の中で輝いている。では暗きに住む民の代表ともいえるニコデモは光を理解できたでしょうか。それとも「暗闇は光を理解しなかった」という結末になるのでしょうか。

　福音書を読んでおりますと、ファリサイ派の律法学者というのはイエス様の敵対者、最終的にイエス様を十字架においやる勢力とみてよいのですが、改心以前のパウロがそうだったように、このニコデモもその熱心さは疑いようがありません。またここでの議論を見る限り、イエスを陥れようとして罠をかけにきた人物でもありません。その誠実さ、真実さはあきらかです。しかし、嚙み合わない。ファリサイ派の教師、これをラビといいますが、ラビのニコデモと、イエスさまの会話はすっと読んだだけでは頭に入ってこないと思います。ここではイエス様が用いられた言葉にこだわりたいのですが、ふたりの議論の中心は、救いを「新しく生まれる」と表現していることです。神の国を見るという表現も、神さまのご支配が明らかになる、表されるということですから、ニコデモの持っている関心からすれば、イスラエルがメシアによって解放される、救われるという意味だと受け止めておきましょう。ただしイエス様が語られているのは

そこに直接つながってはいません。だから、地上における解放をおそらくは第一に考えているニコデモを、イエス様はこの地上の体、つまり肉に囚われたものと見ておられます。そして、神は霊であるのだから、あたらしく生まれなければ神の国に入ることは出来ないと言われる。この神の国を見る、あるいは神の国に入る、という表現が、現代に生きるわたしたちの幸せ、幸福といったことの範疇にない言葉ですので戸惑ってしまうのですが、この世において救われたい、神の救いを見たいと願うニコデモに対して、イエスは「新しく生まれなければ、それは無理だ」ということを言い渡されます。ニコデモは額面通りにこの言葉を受け取って、年を取った者がどうしてもう一度母親の胎内に入って生まれ直すことが出来るでしょうかと問い返すのですね。ニコデモの誤解は、「新しく生まれる」という出来事を肉体に限定していることです。それは、彼が肉体の属するこの世の理・常識に支配されているしるしです。そしてその世界では肉体に終わりをもたらす死が究極の力を振るう暴君として君臨している。それをこそイエスさまは終わらせに来たのです。体だけの問題ではない。だからニコデモに向かいこう言われます。「だれでも、水と霊によって生まれなければ、神の国に入ることは出来ない」

　このイエス様の発言は最大限の注意を払って聴かなければならないキーワードです。一言一句、聞き洩らせない。とくに「水と霊によって生まれる」という言葉の意味内容を、わたしたちに都合よく聴き取ってはならないと思うのです。わたしが言うのは「水」を軽く扱うことと「霊」を偏って捉えることです。ここでイエスさまが言われた「新しく生まれる」ことを、そのままのあなたではダメです、悔い改めなさい、改心なさいというように勧めて、何か救いが、わたし個人の霊的な再生によって到達できるというように解釈することは誤りです。聖書は、人間が神無しで生きられる、なんとかなると考えることを見当違いとして退けます。そのように、人間が自分の力で、

自律的に到達できるものとして「新しく生まれる」ことは出来ない。だから「水」が大切なのです。「水と霊によって」という場合、まず「水」が先にある。この水は洗い清める水であると同時に、古いわたしを水に沈めて、殺してしまう。肉のわたしに引導をわたす水です。つまり、今のわたしの延長線上に神の国を受け継ぐということはありえない。わたしが、そこで斥けられなければ、ゼロにならなければ、手をからっぽにしなければ、神さまから与えられる恵みとして新しい命を受け継ぐことはできない。霊は神から来ます。だれも神の霊によらなければイエスを主と告白することは出来ないとコリントの信徒への手紙の中でパウロが述べていますように、人間がポケットからハンカチを出すように、神の霊を自分の都合で操作できるものではありません。風は思いのままに、自由に吹く、とここでイエスさまが語られたのは、わたしたちが水に沈められて自分に死んで、神の息吹によって新しく生まれさせられる。その出来事は徹頭徹尾、神さまの主導権のもとにあるのであり、「水と霊によって新しく生まれる」のは、わたしで何とかなる事柄ではなく、キリストの次元の出来事、神さまに決定権のある選びの出来事だということです。この生まれつきの自分が廃止されることがなければ、救いに入ることが出来ないという筋道を、ニコデモには理解できずに、「どうしてそのようなことがあり得ましょうか」と呆然としてしまいます。これに対してイエス様は、あなたはイスラエルの教師なのにこんなこともわからないのかと、なかなか手厳しいですが、しかし、ここのところは本当に命の分かれ道であるゆえにおろそかにはできない。またこの３章のイエスとニコデモの会話は、このあとの４章のイエスとサマリアの女の井戸ばたでの会話にもつながってゆく。こうした対話を通して、イエス様は根気強く救いへ導いてゆかれる。「人は新たに生まれなければ、神の国に入ることは出来ない」という筋道を、個人の改心の努力にあてはめるのではなく、神を自分の救

いのための手段として用いようとする見当違いを指摘し、そうした自己中心性こそが水に沈められ、終わらせられねばならない。そして、新しく生まれるために、どうしてよいかわからないニコデモに、イスラエルの歴史の中から故事を引いて大きなヒントを与えられました。それが「モーセが荒野で蛇を上げたように、人の子も上げられなければならない」という預言です。これはエジプトを脱出したのち４０年に及ぶ荒野時代の出来事をしるした民数記のエピソードで、神とモーセに逆らったイスラエルの民に神が炎の蛇を送られ、これに噛まれた民が多く死にました。そこで赦しを求めた民の嘆きを聞いて、神はモーセに、旗竿のさきに、その蛇を模したものをつくり、掲げるように命じます。モーセが青銅の蛇を作って旗竿のさきに掲げたところ、蛇に噛まれたものたちはその青銅の蛇を仰ぐと命を得たと記されています。ここから、「モーセが荒野で蛇をあげたように、人の子も上げられなければならない」というのは、イエスさまご自身が十字架の上に挙げられて、人々から仰がれること、それによって、信じる者が皆、人の子によって永遠の命を得ることが出来るようになる、つまり、水と霊によって新しく生まれるための道を、十字架に神の独り子が掛けられることで成し遂げて下さるのです。このように、キリストが挙げられること＝十字架によって、わたしたちの新しい命の道が開かれるという中心を忘れてはなりません。実際、今日、このあと讃美歌でも歌いますように「主のうちにこそ、喜びがあり、愛が育ち、命があり、すべてがある」のです。キリスト抜きでは何も始まらない。それは肉を持つわたしの限界です。肉は肉でしかないから、霊の出来事を理解できない。だからこそ、神の霊がわたしたちの肉体をまとって、目に見える形でこの世界のなかに入ってこられたのだと、それこそが神の救いの出来事であるイエス･キリストの誕生、受肉と表現される神の愛に眞から出た秘儀なのです。そして、神に背いて生きているわたしたちの罪のために、この方は

挙げられる。十字架の上に、そこでわたしたちは、神がどれほどに、わたしを愛しておられたかを知らされる。その時に初めて、わたしが、わたしのために生きるというこの世の当たり前が変えられる。そのように、イエス・キリストの命の出来事のなかに位置づけられることなしに、人は生きる意味を見出すことが出来ない。苦しみの意味、悲しみの意味、人生のさまざまな負の局面とのおりあいをつけてゆくことができない。キリストを無視して生きるとき、わたしたちの歩みは、太陽のもとでは影が出来るのに、陰の存在を無視して光のところだけを歩こうとうするような、３６５日毎日晴れた日を歩こうとして、雨の日や曇の日などないかのように生きようとするのと同じ、失敗や挫折や、苦しみや悲しみのない日々がわたしたちの人生に全くないなどということはないのに、あたかも毎日が誕生日で、特別な日であることを求め、この生命のさきに死が終わりとしてぱっくりと口を開けて待ち構えていることを見ないで生きようとするのは明らかに間違っている。キリストは苦難の底に沈まれました。わたしたちが避ける暗闇をご自身の命のなかに飲み込まれ、滅ぼされます。死に勝利される。そこに永遠の命への道が備えられたのですが、この救いを頂くためには、ふたたび生まれなければならない。それは神が、永遠のいのちという言葉で表現されたキリスト・イエスのお言葉と歩みを通して、わたしの欠けのある歩みが、しかし恵みの光に照らされており、滅ぼされるのではなく、救われるために生きることへと招かれている。この真実を受け入れることです。神はわたしに敵対するものではなく、わたしを救われる方として、保護者として、導き手として現れてくださった。このことが光である。喜びである、わたしの魂に死を宣告するものではなく、喜びをもたらす命なのです。それは不思議なことに、わたしに代わって、人の子があげられる。十字架の上に挙げられ、死なれたことを知る時に、神の深い憐れみと赦しが、御子の死という悲惨な出来事において、

わたしを救うものであったことをわたしの魂に刻み込むのです。こうして、人間の命の意味を福音は変えてしまう。生き方の向きを変えてしまう。イエス・キリストの十字架と復活のひかりのもとで見るわたしの命と、わたしがわたしのままで、つまり肉のままで、わが・ままで経験して、ほしいままに生きて終わりを迎える命は滅びにいたるしかない。それを自由と履き違えるな、そう聖書は語ります。
命は、創造主である神のご計画の中で初めて意味をもち、輝くものだ、と聖書は告げるのです。これは救いへの招きです。なぜならそれはわたしの人生に、イエス・キリストをお遣わしになった父なる神という新しい保護者が登場することであり、そこから神さまとの新しい歩みが始まるからです。神に祈り求め、問いかけ、裁かれ、たてられ、導かれ、守られる、そういう新しい人生の歩みが始まる。神なき命に終わるのではなく、神ある生命の始まり、人生に意味と目的を見出してゆく神の恵みのご支配の中を歩む人生がそこから始まるからです。神の独り子であるイエス・キリストが、その神の御心を説き明かしてくださる。示して下さる。イエスを信じるとは、イエスが神の独り子であることを信じることであり、神がその独り子を世にお与えになったほどに世を愛されたことがそうして分かります。イエスを受け取った者は永遠の命を得ている。イエスを世に遣わされるほどに愛して下さる神の愛によって、わたしの命の意味が再構成され、新しい意味を与えられているからです。この恵みの消息を再確認して、御言葉のなかにある命と光に照らされた者として、この週の歩みを始めてゆきます。

お祈りいたします。